

ゲーリッツ・スコルジェレッツとEU東方拡大

経済学部教授 加藤 浩平

月報紙面が重厚な論文によって独占されるようになって久しいが、以前より、もっと気軽に掲載できる短いエッセー風の論考も載せるべきだという意見があった。そこで無謀にもこの機会を借りて、それを実践してみたい：

ドイツ・ポーランドの国境を画するのがオーデル・ナイセ河であるが、このうちラウジッツ地方のこの河（ラウジッツ・ナイセ河）沿いに位置する、ドイツ最東端の都市がゲーリッツ（Görlitz）である。河幅 50 メートルほどのラウジッツ・ナイセ河を挟んで、ポーランド最西端の都市スコルジェレッツ（Zgorzelec）が対峙している。ポーランドを始め中・東欧諸国がEUに加盟し、大量の低賃金労働力がドイツに押し寄せて来ることが懸念されている。しかし、ゲーリッツ・スコルジェレッツ両市の現状を見る限り、EUがほんとうに一つになっているか疑問に思わざるをえない。

私は昨年夏に始めてゲーリッツを訪れたが、外観上ドイツで最も美しい町の一つではないかと感じられるこの都市で、すぐ目の前に別世界があるのを奇妙な感情を持ってながめた。ゲーリッツの町は美しく、古いドイツが残っているが、それはこの地が経済史上古くより栄えていたこと、また第二次大戦の戦災を免れたことによる。ここは中世以来、スペインからロシアのキエフに至る東西ヨーロッパ横断の交通路（ヴィア・レギア）の要衝であり、さらに北部ドイツからベーメンに至る商業路も通っていたため、商人と手工業者が住み着いた。以前よりここにはソルブ人（スラブ系）が居住していたが、ドイツの教会勢力はこの地のキリスト教化のためにゲーリッツに多くの教会を建立した。商業（穀物と塩の運搬）や織布業で蓄財したドイツ人もここに豪華なルネサンス建造物を建てた。16世紀初頭にはこの町は人口1万人を有し、街道沿いのライバル都市であるエアフルトとブレスラウの間に挟まれ、この地域の最大都市となった。経済的に余裕ができるにつれこの町は人文主義擁護の地として名を馳せた。ドイツ古典哲学の叢生期を代表するヤコブ・ベーメもこの町で生まれた。この地域は歴史上ベーメン（チェコ）との関係が深かったが、その後ザクセン選帝侯国に領有され、ナポレオン戦後のウィーン会議により、シュレージェン（プロイセン）に帰属した。ザクセン領としてはオーバー（上部）ラウジッツと呼ばれ、プロイセン領としてはニーダー（低部）シュレージェンという地域名で呼ばれるためやや混乱するが、それはこの地が地政上重要な位置を占め、諸国の争奪の的であったことを示している。

第二次大戦後、DDR（東ドイツ）とポーランドの国境としてオーダー・ナイセ線（「平和の国境」と呼ばれた）を認知する2国間協定が、ゲーリッツ（河の東側）において1950年6月6日に締結された。旧ゲーリッツはラウジッツ・ナイセ河を挟んで兩岸一帯に広がる都市であったが、この日以降、河の東側はポーランド領スコルジェレッツという新しい都市になったのである。河の東側のゲーリッツ（高級住宅街であった）に住んでいたドイツ人は追放され、もっと東方のポーランド地域から新住民（ポーランド人）が新都市スコルシェレッツに移植された。人工的に二分された両市は目と鼻の距離にあったとはいえ、戦後ずっと疎遠であり続けたようである。ドイツ統一以降、ドイツの都市ゲーリッツが史跡保護指定を受け、街並みが続々とお化粧直しされたため、ポーランドの都市スコルジェレッツの寂れた外観との対照は一層明白になった。ところで、昨年ポーランドがEUに加盟したことで風向きが変わってきた。国境がなくなることはないが、両市は同じヨーロッパに属する都市として新たな提携の模索を始めたのである。街の至る所に、「ニーダー・シュレーゼンのヨーロッパ市であるゲーリッツ・スコルジェレッツによろこそ」という看板が目につくようになった。現在の国境検問所のある橋とは別に旧市街地のすぐ脇に新たな橋（写真参照）を架けることにもなった。（建設予算の承認をめぐってスタモンダがあった。）両市の演劇の交流、都市づくりのための行政どおしの情報交換が始まった。そして最重要のプロジェクトは、両市の子供たちによる相互の言葉の習得である。双方から14人の高校生が選ばれ、同じ教室で授業を受けるのである。しかし、ポーランド人子弟はドイツ語の習得に熱心であるのに、ドイツの子供たちはポーランド語の習得を困難に感じ、すぐ止めてしまうという。ポーランドの若者はドイツ語ができれば、ゲーリッツで高賃金の職に就ける可能性があるからである。しかし家庭では、ポーランド人両親はドイツ語が出来ないのが一般的である。両市での生産活動の交流も始まった。例えば、寝具製造の系列企業として、スコルジェレッツの「グビンテクス」社が寝具の製造を、ゲーリッツの「ナイツェクス」社がその販売、流通を担当して、両社で分業体制をとっている。しかしこうした事例はまだ少ない。その理由としてドイツ企業がもつポーランド人への偏見（「車の盗難はポーランド人の仕事」といった類）がある。ポーランドの投資家がゲーリッツで住宅を購入しようとしても物件が出ないという。ポーランドのEU加盟によりドイツとの国境地域は経済交流の可能性がもっとも高いと思われるが事態はそうっていない。ラウジッツ・ナイセ河付近（ドイツ側）にはゲーリッツの他、パウツェン、レーバウ、ツィッタウといった歴史の古い都市やコットブスといった工業都市が散在しているが、これらの都市は東部ドイツでもっとも失業率の高い地域でもある。ゲーリッツの人口も統一前は8万6000人であったが、統一後、若者の流出が続き、現在では6万人に減った。住民の平均年齢は55歳ほどであり、住宅の25%は空き室となっている。他方、スコルジェレッツの人口は3万5000人ほど、平均年齢は35歳と若く、多くの住民

が住宅不足に苦しんでいる。この人口はドイツ統一後増加傾向にある。隣町ゲーリッツの賃金が5倍ほど高く、統一直後の時期にはポーランド人も経済交流を通じ利益を上げることができたからである。今となっては、ポーランド人の若者に魅力的な就業チャンスを与える余力はゲーリッツにはない。

ドイツ・ポーランド間の国境は近くて遠い。それを最も象徴するのがゲーリッツ・スコルジェレッツの両市である。この二つの都市を分断するラウジッツ・ナイセ河のほとりに立つと、EUの東方拡大が現実に成果を挙げるにはまだまだ時間がかかると思わざるをえない。

